５．Ａ－０５

ことばよりも行動で示すASD児に対し構造化を用いて言語訓練を行った一例

言語聴覚士学科

【はじめに】

話し言葉の有無にかかわらず，ASD児にとって自分の意図や意思や感情を他者に伝えることは苦手である．（中略）自発的に表現する場面が限定的であり，ある場面で表現できるからといって，いつでも誰に対しても表現できるとは限らない．そのため，いつ，誰に，どんな場面で，コミュニケーションを開始したらよいのかを具体的な状況の中で身につけていく必要がある．[1] 自宅では意志の表出ができるが，外では行動で示してしまうASD児に対し，TEACCHに基づいた物理的な構造化やスケジュール提示，課題の視覚的構造化を用いて良好な変化が現れた事例について報告する．

【症例（紹介）】

●性別：男児●年齢：8歳1ヶ月（小学3年生）※2018年4月時点●医学的診断名：知的障害を伴う自閉症スペクトラム障害（ASD）●療育手帳：A●家族構成：父・母・本人●教育歴：支援学小学部在学中●相談室来室歴：2017年9月～●主訴：ことばより行動が先にでて困っている．（他児と一緒に遊びたい時にボールをぶつけてしまう．物を奪い取ろうとするなど）

【目標】

短期目標：ヒントにより意志の言語表出が行える
長期目標：意図的で自発的な言語の表出

【方法】

コミュニケーションの形態が「行動」となっているところを「話しことば」にするよう，TEACCHで述べられている構造化を用いて訓練を行った．内容は以下のとおりである．①一貫してスケジュールを明確に示す．（本児がスムーズに訓練を行えるため）②他者との境界に視覚的な目印を置く．（目印を気に留めることでことばより行動が先に出るのを防ぐ）③課題を絵と文字を用いて視覚的構造化する．④本児の意志表現に必要な言語カードを用意し，それを提示することを促す．（コミュニケーションの形態を行動から話し言葉に変化させるため）

【結果】

①スケジュール提示：スムーズに訓練を進めることができ，したくないことがある時や先にしたいことがある時には自ら変更を要求できるようになった．
②境界の視覚的提示：初対面の人に対しても適切な距離で場面に合った行動とことばでの誘いができた．
③課題の視覚的構造化：初めての課題でもスムーズに行えるようになった．やりもらい関係では，落ち着いて相手に要求を伝え，受け取るところまではできるようになったが，『もらってからお礼を言う』というタイミングの定着には至らなかった．
④言語カードの使用：訓練中したくないことがあると，室内を走り回ることで表現していたが，言語カードの使用を通して，「やりたくないです」「もっとあそびたいです」の二語は，自発的に言語のみで要求できるようになった．

【考察】

ASD児は聴覚情報処理よりも視覚情報処理が優位な傾向がある．[2]本児も新版K式発達検査の結果から，聴覚的理解より，視覚的理解の方が良好であることがわかる．したがって，スケジュールや課題の視覚的構造化，言語カードの使用が特に有効であったと考える．

また，大石は，自閉症の人たちの認知構造を科学的に捉え，その理解に基づいて彼らが情報を処理しやすいように徹底的に工夫することで，彼らと私たちとのコミュニケーションは飛躍的に有意義なものとなりうる[2]と述べているが，今回の訓練で構造化を取り入れたことにより，本児のコミュニケーションスキルが向上し，他者との良好な関わり方ができるようになったと考える．

【まとめ】

今回の事例では，視覚優位なASD児の訓練にTEACCHプログラムに基づく構造化を取り入れたことにより，良好な変化が現れた．

【参考文献】

１）新澤伸子：TEACCHのコミュニケーション・カリキュラムに基づくASD児のコミュニケーションのアセスメントと指導. コミュケーション障害学. 34, 2017, 130-134.
２）大石敬子：<入門コース・ことばの発達と障害>③ことばの障害の評価と指導. 大修館書店. 東京, 2001, 152-175.